

最新事情

「大商」ならではの商業教育で、
社会に有益な人材を送り出す

滋賀県立大津商業高等学校

(滋賀県大津市)

滋賀県立大津商業高等学校は、地元で「大商」という呼び名で親しまれている商業高校だ。創立112年の歴史と伝統を守りながら、「総合実践」など商業高校ならではの授業を展開している。学科は総合ビジネス科と情報システム科の二つ。両学科の3年生が受講する「課題研究」の講座「ビジネスマナー講座」で導入している秘書検定の取り組みを中心に伺った。



平成29年度に赴任したばかりの今井義尚校長。校内でのコミュニケーションを大切にしており、生徒や教員に積極的に声を掛けている

基礎力・実践力の教育と、 人づくりを重視

琵琶湖の南西に位置する滋賀県大津市。滋賀県立大津商業高等学校は、県内に2校ある商業高校の1校だ。創立は明治38年で、100年以上にわたりこの地域の商業教育を支えてきた。「本校には商業のプロフェッショナルを育成する」という大きな使命がある」と話すのは今井義尚校長だ。平成29年度に赴任したばかりだが、すでに学校のリーダーとして溶け込んでいる。「毎日、各部活の朝練を見てから校門に立つのが日課です。登校する生徒を待っていると、『校長先生、おはようございます』と声を掛けてくれます。寒いときは『風邪をひいていませんか』

と気に掛けてくれます。普段の生活の中で、一言二言交わせるのはよいことです。こういうコミュニケーションは人づくりに必要不可欠。私も積極的に生徒、教員に声を掛けています。」
「人づくり」は、同校の商業教育を語る上で欠かせないキーワードだ。教育で大切に行っていることを今井校長に伺った。

「社会に必要な基礎力、社会で通用する実践力の育成、人づくり。この三つを教員間で共有して教育に取り組んでいます。基礎力は商業・情報処理の専門知識を生かすために必要な力です。専門知識をより確かなものにするためには実践力が重要。社会で使えなければ意味がない」と話し、人づくりについてこう続ける。

「社会のさまざまな場面、ロボットやAIが出てきています。将来なくなると予想されている職業もある。しかしロボットが人間の代わりに仕事ができたとしても、人としての在り方や心構えは人間社会の根幹に関わることであり、と思うのです。倫理観やマナー、あいさつなど、人として大事な部分を教育する人づくりが欠かせないと考えます。」

今井校長の教育に対する熱意は、「大津商業改革プロジェクト」の実施にもつながっている。今井校長は赴任後、全教員を対象に、大商の教育についてアンケートを実施した。そこでは、「生徒の可能性を引き出せていない気がする」「能力が頭打ちになってきている。もっと力を伸ばしてあげたい」などの課題が出てきたという。

(左から) 杉本祐紀先生、田中正春先生、森川雅子先生。同校の卒業生である田中先生と森川先生は課題研究の「ビジネスマナー講座」を担当。生徒の情報を共有したり、指導法を試行錯誤している



「教員60名が小グループに分かれてディスカッションを行い、課題を話し合いました。集約した課題は、各部署に改善点を提言します。例えば商業科目の担当者には、『より高いレベルの検定や資格試験に挑戦させたらどうか』と提案。そこで1月は検定・資格取得の強化月間とし、授業や補習でサポートすることが決まりました。現在、取り組みの真っ最中です。生徒に、『商業高校に来てよかった』と言って卒業してもらいたいです。そのためにも改革プロジェクトを進めていきたい」。

学んだことは現場で生かすことに意味がある

商業高校での学びを社会で生かせるよう、特徴的な授業を展開する同校。今回は3年生の「総合実践」と「課題研究」について紹介する。「総合実践」は、商業高校ならではの科目だ。1年生のときから簿記や会計をはじめ、ビジネスマナーなどを学ぶが、各科目の関連性を理解するのは難しい。それを可能にするのが総合実践の授業であり、商業の学びの集大成となる。

授業を見学した。会計ソフトが入ったPCが幾つも並ぶ実習室は、「東京市場」と「大津市場」に分かれている。授業には10名の教員が入り、

生徒をフォロー。担当教員の一人である田中正春先生は狙いをこう話す。

「社員3〜4名の商社を設立し、模擬取引を行います。実践を通して各科目の学びがつながることを理解し、問題解決能力、情報を解明・分析する力などを身に付けるのが狙いです」。

授業の始まりと終わりには必ずお辞儀をします。「よろしくお願ひいたします」「ありがとうございました」と言った後に、3秒間礼をすること(分離礼)を徹底している。

「社会人に必要とされる態度、立ち居振る舞いを身に付けるのも大事なことです。あいさつ、明るい態度で接すること、手際がよい応対を心掛けることは、企業の一員であるという自覚にもつながります。この意識があれば、すんなりと実社会に溶け込めると思います」(田中先生)。

実践力に限らず、社会人に必要な心構えの習得にも通じる「総合実践」は、同校の商業教育には欠かせない科目となっている。

もう一つ、特徴的な学びが「課題研究」だ。15ある講座の中で特に人気なのが「ビジネスマナー講座」。受講者の数は118名と、学年の半数近くに上り、今年度は4クラスに分かれ指導している。クラスを一つ受け持つ田中先生が授業内容を詳しく教えてくれた。

「6月に秘書検定を受験させています。生徒は2級と3級の内容を見て、受験する級を決めます。試験終了後は、茶道やフラワーアレンジメントの講師を招き、講習会を開催しています。

2学期は調べ学習が中心で、婚葬祭や海外のマナーなど、好きなテーマについて調査し、資料をまとめます。一年を通して、マナーについて広く学ぶことができる講座です」。

秘書検定は6月の試験に向けて、集中して学習する。指導法はクラスごとに異なるそうだ。

「私のクラスでは実技の内容を中心に解説することが多いです。ビジネス電話の受け方、ビジネス文書の書き方、郵便の出し方など、参考書を読んで理解したつもりでも、実際にやってみるとスムーズにできないもの。実技は可能な限り、実際に生徒に体験させています。その方が身に付くスピードも早いです」(田中先生)。

他の教員はどうか。森川雅子先生に伺った。「実問題集を中心に学習しています。生徒から質問があった問題は詳しく解説します。質問が多いのは、やはり実技の問題です。例えばビジネス文書の書き方。特に文章の構成や言い回し



(左)「総合実践」では、授業の始めと終わりにお辞儀をする
(下)東京市場と大津市場に分かれ、模擬取引を実施

(左から) 総合ビジネス科3年生の野村美公さんと、東江華帆さんは秘書検定2級に合格。「知識だけでなく、コミュニケーションスキルも習得できたと思う」と手応えを聞かせてくれた



が難しいと感じるようです。保護者宛ての文書などを例にして、『拝啓、敬具を使い、記書きになっているね』と説明しています。身近にある文書で説明すると、理解しやすいようです。

指導法や解説のポイントはそれぞれ異なるが、実際に使える知識を習得してほしいという思いは同じ。各教員が指導に工夫を凝らしている。

〆視点や考え方が変わった〆 高まる社会への意識

「ビジネスマナー講座」を受講する東江華帆さんと野村美公さんは、平成29年6月に秘書検定2級に挑戦し、合格した。

「初めて知ったのが席次です。上座、下座という言葉も読み方も知らなかったので勉強になりました。車では助手席が一番よいのかと思ったり間違いで驚きました。特に難しかったのが言葉遣いです。敬語は暗記に苦労しました」と話す東江さんの横で野村さんもうなずく。

「敬語は〆お〆か〆を付ければよいと思っていたのですが、大きな間違いでした。一つ一つ覚えるしかないのです、頑張つて暗記しました。不適當を選ぶ問題は、選択肢が全て適當に思えてしまい、不適當を見極めるのが難しかったです」と振り返り、秘書検定の学習を通して変化したことを、こう話してくれた。

「視点、考え方が変わった気がします。例えば上司が体調が悪そうなときや、部下を指導するとき、秘書として、先輩としてふさわしい対応が勉強になりました。秘書検定の学習を通して、仕事をする上で必要なコミュニケーション全般を学ぶことができたと思います。」

秘書検定の挑戦を通し、学びを深めた東江さんと野村さん。二人とも卒業後は進学する予定だ。栄養士を目指す東江さんは「栄養士はいろいろな人と接することが多いと思うので、人間関係を築くときに生かしていきたいです」と抱負を聞かせてくれた。

指導を担当する田中先生は、「ビジネスマナー講座で秘書検定を導入した理由は、コミュニケーション、思いやりが学べるからです。秘書検定と聞くと秘書の仕事内容が思い浮かびますが、それだけではありません。人として大事な部分が理解できていないと、解けない問題がたくさんあります。人づくりを重視する本校の教育に、秘書検定は適していると思います」と、その内容を高く評価する。

「課題研究」にはまだまだ興味深い講座がある。「プレゼンテーション講座」では地域活動に参加。琵琶湖に浮かぶ沖島と連携し、滋賀県の特産品である鮎寿司を使ったピザのパッケージをデザインした。担当教員は杉本祐紀先生だ。

「こだわったのがパッケージの色です。使う色によって、与える印象が変わってきます。校内で調査を実施した結果、青をメインで使うこと

にしました。琵琶湖のイメージと、鮎寿司はおいがきついイメージがあるので、爽やかな印象を与えるためです。この講座では、学校ではできない体験をすることが出来ます。漁師や販売店の方など、いろいろな人と交流することでコミュニケーションの重要性を実感します。」

さまざまな取り組みで、生徒の成長を支える大商の学び。今井校長は改革の手を緩めず、教員とともに突き進んでいく考えだ。

「大商で学んだ基礎的なこと、実践的なこと、人として大切なこと。ここでの学びを生かせば、どこに行っても活躍できると思います。社会に貢献できる有益な人材になって巣立ってほしいのです。改革を続け、『大商を卒業してよかった』と言ってもらえる学校にしていきたいと決意しています。」



「ビジネスマナー講座」では、秘書検定の学習に限らず、茶道やフラワーアレンジメントも学ぶ。「テーブルマナーも実施します。マナーは身に付けられれば得ることを理解して学習してほしい」と田中先生は願いを込める

